始

本集挿圖配列順は　御物舍利殿繪屏風を先にして現在の舍利殿障子繪を後に致すべく命ぜられ候所製本の際名稱の同一なる爲に誤つて之を前後致候間此段御ことはり申上候

法隆寺大鏡第卅一集挿圖解說

第一、御物　黑漆螺鈿鳳凰紋唐櫃蓋見返

此唐櫃の說明は、既に第卅集に揭載し、蓋の見返も從うて之を明かにしたれば、今は挿圖の足らざりしを補ふのみにて、再び絮說を試みず、

第二―第十三、御物　舍利殿障子繪二曲屏六隻

各高四尺九寸一分　濶三尺八寸三分

舍利殿は順德院の御宇承久元年二月より再營して、明くる二年二月、殆ど期年を費し、勝月上人慶政が新願に依りて成れる建築なり、其後貞治四年五月、中央に黑漆宮殿を設け、佛舍利を其東戸に、靈寶を西戸に納むるの裝置とし、正面には即ち承久改造より二年を經て、同四年三月法眼尊智が繪ける太子勝鬘經講讃の御影を貼り、其後壁には傳へて金岡筆と稱せらるれども、又尊智が作と認めらるゝ蓮花に白雲の圖を裝せり、當時中央宮殿の左右なる東西の柱間には、如何なる裝置ありしや、今實況を證するの資料を有せざれども、是より多少の年所を經て、東西併せて六間の障子は絹本着色の繪畫を以て裝飾せらるゝに至り、御物となつて保存せらるゝ二曲屏六隻は即ち後世傷損の甚だしき修理に堪へざるを以て、剝き取りて其樣式を改めたるものなり、其圖樣東の三間六枚の障子、即二曲屏三隻は史記に所謂商山の四皓、召されて漢宮に抵るの圖にして、其一隻は山岳峻嶒、水波沈洋、樓閣巖角に隱見し、水榭波に浮ぶ、四皓相集りて雪景を賞しつゝ、圍碁を圍はすの圖を寫す、即是れ商山隱遁自適の光景なり、次の一隻は四皓愈商山を出て、先づ江水を渡りて長安に向はんとする圖なり、二老馬に騎して行手を急ぎ、一老扶けられて正に船を下らんとす、第三隻は即ち漢宮を寫し、先驅の一老近く馬を進め來り、都人樓より指示して之を眺がむる樣あり、三隻各其光景に變化を與へつゝ、四皓をして自ら商山より漢宮に引接せしむ、西の間六枚の障子は、周の文王呂尙を渭水の濱より聘し、車を同うして其宮に歸るの圖にして、第一隻は呂尙渭水に臨める水亭の樣に出てゝ釣を垂れ、文王遙に下りて携笏し禮を爲ふして出廬を乞ふ所圖の下段には呂尙既に舊廬に謝し上都に赴かんとする所あり、警護の人馬肅々として並び進む、第二隻は呂尙文王と對坐して車中に在り、巨象其轅を曳く、琴鼓笙笛を手にせる樂隊其後に隨ひ、鼓樂の響き君臣相得るの慶を奏しつゝ、漢浙を過ぎて進む所を寫す、第三隻は周の宮殿の圖なり、先驅また徐に進み來りて之に入らんとす、一は賢臣を得て國祚を永遠に固め、一は君臣相會て興國の基を肇む、此千古の美談は夙に支那史籍の將來に由りて我國に傳へられたりと雖も、是を畫圖として徵すべきは、鎌豐時代以前に在りては、當に此圖を以て嚆矢と推さゞるを得ず、鎌豐時代の宮殿の裝飾畫は、先づ題材を支那史料に仰ぎ、主君が常住坐臥に其圖を眺めて監戒の用と爲るべきを擇び、文王と太公望、漢帝と四皓との圖の如き、就中好箇の題材と知られしが、それ以前に在りて斯る圖樣を南都の一舍利殿に見るを得るは、我國宮殿裝飾畫の淵源を繹ぬるに於て、遺失すべかちざる資料と云ふべし、料絹の經緯粗硬にして往に類し、三

幅を繼合せて一鋪となす、これ既に織豐時代に見るべからざるの製なり、線は細毫を以て作れりと思ほしく、纖鋭にして婉曲なる筆致を弄せず、間一氣に曲折せしめて、筆鋒の峻烈に過ぐるの感なきにあらず、此技巧また後の裝飾畫に現はれざる特徴たり、彩色は重厚にして泥金截金併用ゐ、所謂佛畫師の手法と相倚る所あり、特に樓閣屋上に蓮花を配し、文王の面薄中に輪寶を冠せる人物の存する如きは、取材の本源近く佛畫に存するを思はしむ、是に由りて觀れば作家は南都の佛畫師にして、支那史實を畫くに憑據すべき本樣のある無く、時世又此種畫樣の流傳未だ洽ねからざるに際し、百方苦慮、在來の手法に依りて此大圖を構成したるなり、其兵仗に純日本式のものを寫し、樹木に鎌倉時代の繪卷物に見るが如き一筆書の側斂法を遣り、波紋もまた並行せる彩墨二線を以て起伏の態を畫き、數條の線を正しく列ねて蕩漾の意を表し、層波整然として一絲紊れざる描法より成れるは、舊樣によつて分毫も新意の加はれるを見ず、佛畫師傳來の法を唯一の手段として、斯る新奇の題材を縱横に揮灑したる作家は抑も何人ぞ、傳へて土佐光信といふも信ずるに足らず、思ふに足利初世、佛畫師の尚は勢力を有して前代の手法未だ全く轉化せざる時の作に係れるならん、

第十四、第十九、舍利殿障子繪

各高五尺六寸二分　闊四尺四寸二分

前に述べたる障子繪、其後傷損して使用に堪へざるを以て、二曲屏に改裝して綱封藏に收められ、更に長谷川等員をして舊樣に依りて寫さしめたるもの、今も同殿の障子として使用せらる、圖樣殆ど等差なしと雖も、描法と配景とには自ら新作家の自由なる筆法の現はるゝを見る、等員之を畫きしこと中院良調の古今一陽集に見え、良調は元祿享保頃の人なれば、新寫の成れる時代は德川初期を降らざるべし、唯等員の名長谷川系圖に傳はらず、其年代を明かにすること能はざるを遺憾とす、

(左图) 假山技巧图例

今世西方的光芒

公侯設宴 設宴公侯

北京圖書館藏

（一八） 槍子院西 図利介

(1) 風屏拾殷利公　物御

(二五) 風屏繪殿利舍　物即

洛川一集 風景拾遺扇面冷金物御

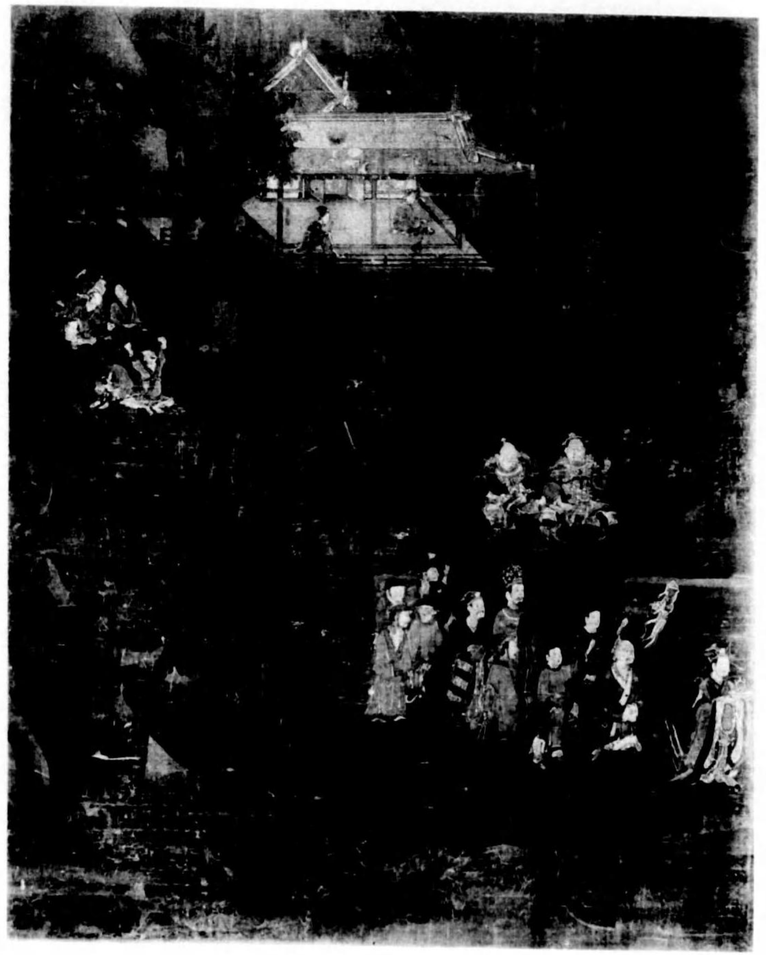
四五 風俗繪屏風 物部

五五 風俗繪殷利公 物御

帝國圖書館藏

四物　各付殷情好風一

清華大學圖書館

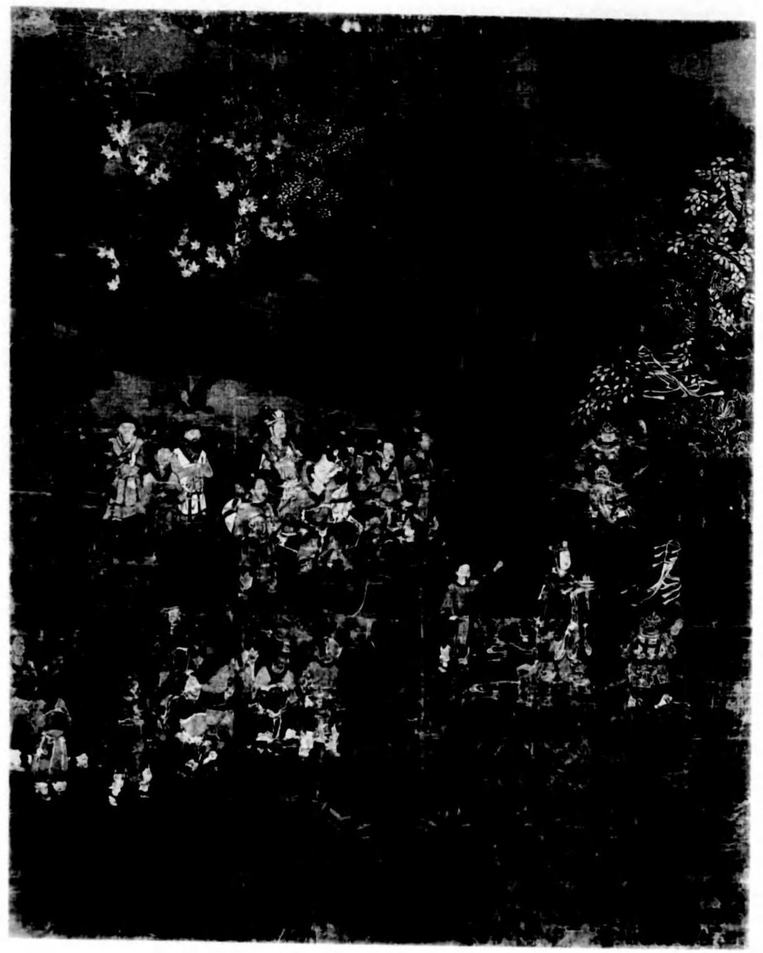


印物　舍利殿繪屏風　四

法隆寺藏

八王風好檢殷利含　物師

如來涅槃會 舍利殿前風屏 御物



十六 風景仙遊圖六 物部

故宮博物院藏

[illegible] 屏風絵 [illegible] 物語

二十八 風月樓殷刊会　物30

大正五年五月廿六日印刷
大正五年五月三十日發行

大和國法隆寺藏版
東京美術學校編輯

發行者　東京市下谷區上根岸町百廿二番地　白石村治
印刷者　東京市下谷區中根岸町六十八番地　武田勝之助
發行所　東京市下谷區中根岸町六十八番地　墨彩堂

終